

重名詞句転移における前置詞残留禁止の問題について

平野 湧久

0. 概要

重名詞句転移(Heavy NP Shift(以下 HNPS))は、右方移動現象の一種であるが、HNPS は Wh 移動とは対照的に、前置詞の目的語に対して、通常その適用が禁止される。本稿はこうした HNPS に観察される現象を、Pair Merge に基づく Form Copy の分析と、PP における phase の形成、及び LCA 分析の三つの観点から議論する。

1. 提案

1.1 英語における HNPS

英語における HNPS は、文中の重い名詞句が文末に転移する現象である。(1)には典型的な HNPS の例を示している。Heavy NP(以下 HNP)は(2)の VP 削除の例から、従来 VP への付加という議論が展開されており、本分析は前置詞の目的語を含めて、HNPS は VP への付加を landing site として分析を行う。

(1) John bought t_i for his mother [a painting that he liked]_i. (Rochemont and Culicover (1990: 116), slightly modified)

(2) a. John gave to Mary a picture of Lyndon Johnson, and Bill did too. (Rochemont and Culicover (1990: 118))

b. *John bought for Mary a picture of her father, and Sally did every book she could find.

(Rochemont and Culicover (1990: 120))

HNPS は文中の重い要素に対して適用されるが、(3)に示すように前置詞の目的語に適用することはできない。

(3) a. *John looked at t_i in the living room yesterday [the man who lived next door]_i. (Drummond et al. (2010: 689))

b. *I put it on t_i yesterday [every table in his living room]_i. (Johnson (1985: 86))

本分析は(3)のように HNPS が前置詞の目的語に適用不可となる理由を考察する。さらに本分析は前置詞に対して、PP が strong phase の一種であると想定する(Matsubara (2000: 146)の主張に基づく)。

1.2 Linear Correspondence Axiom と右方移動

続いて(4)に Kayne (1994)による Linear Correspondence Axiom (以下 LCA)に基づく分析を示す。この LCA 分析を拡張する形で Kitada (2012)は右方移動現象の説明を試みている。

(4) Linear Correspondence Axiom (LCA) : Kayne (1994)

If a non-terminal X asymmetrically c-commands a non-terminal Y in a given phrase marker P(hrase), then all terminal elements dominated by X precedes all terminal elements dominated by Y in P(hrase). (Kitada (2012: 229))

LCA は日本語の語順を適切に説明できない点など論点が残っており、そうした問題点に対して、Kitada (2012)は(5)に示す提案を行なった。

(5) Linear order within a phase domain (CP or v^*P) is determined by the LCA, whereas linear order within a non-phase domain (TP or VP) is determined by the head parameter. (Kitada (2012: 235))

この提案は phase ではない領域における線形順序が head parameter に決定されるというものである。さらに移動に関して、Kitada (2012)は(6)に示す重要な指摘を述べている。

(6) a. Leftward and Rightward movement should have distinct effects at the interface levels, including a difference between old and new information.

b. If an element moves leftward after it moves rightward, the interface levels have to interpret the contradicting information. (Kitada (2012: 244))

本分析はこれに基づき、以下の3つの想定に基づき分析を行う。まず、前置詞の目的語に移動が適用される場合、その移動は左方移動である。そして HNPS を適用する際に左方移動と右方移動の両方の移動は適用できない。さらに前置詞の目的語に HNPS を適用する場合、Form Copy による Copy relation が適切に形成されないという3点から分析を行う。

2. 分析

2.1 前置詞の目的語に対する HNPS 適用について

ここで、(3)に示した例をもとに Form Copy(以下 FC)分析を行う。(3)では前置詞の目的語が VP に Pair-Merge を適用されることになる。この時、Pair-Merge の特性から HNP は非可視的となる。pP Phase の Transfer 時には

依然として Pair-Merge を受けた要素は非可視的であり、HNP は適切に Form Copy を受けることができないと考えられる。また、LCA に基づく分析を考える。この時、PP は phase であるため線形順序は LCA によって決定されることになり、左方移動を受けることになる。PP が Transfer を適用される時、HNP は pP の HNP と適切に Copy Relation を結ぶことになる。さらに HNP が VP への Pair-Merge を受けることになるが、この移動度操作は左方移動と右方移動の両方の移動を適用されることになり、適切ではないと主張する。この点については、Tanaka (2022) に示唆される HNPS と Wh 移動おける Merge の種類に帰結する可能性がある。以上のことから、LCA に基づく分析は、argument PP 及び、PDC に対して共通した分析を提示できる。

2.2 Preposition Dative Construction に対する HNPS 適用について

ここで Preposition dative Construction(以下 PDC)の派生は(7)に示す Pesetsky (1995), Tanaka (2022)の派生を採用し、以下の(9)の例について分析を行う。

(7) [pP DP1 [p' [p [PP [p X [DP DP2]]]]]] (X は前置詞を変数として記述しているもの)

(8) *I gave [DP1 the book] to t_i yesterday [DP2 a man with long hair]_i. (Otsuka (2017: 177))

この派生では、HNP が DP2 の位置に生じる。この派生では pP が phase であり、PP が Transfer を適用される時に、HNP は pP の edge にある HNP と適切に Copy Relation を結ぶ。さらにこの HNP が VP に Pair-Merge の適用を受ける。VP が Transfer を適用される時、HNP は VP に付加した HNP と Copy Relation を結ぶことになるが、この移動も左方移動と右方移動の両方を適用されたものであり、移動操作として問題があると考えられる。

3. HNPS と再構築効果

HNPS では従来、再構築効果が観察されないことが観察されてきた。以下の(9)に示すのは、否定極性表現を含んだ HNP に対して HNPS を適用した場合に非文となる例である。

(9) a. I showed [none of the pictures of John's mother] to anyone. (Takano (2003: 522))

b. *I showed t_i to anyone [none of pictures of John's mother]_i. (Nishihara (2005: 32))

この派生に生じる非文法性も HNPS に対する移動操作を分析することで説明することができる。まず、否定極性表現に対する西岡 (2007)の分析をみる。

(10) a. Even then [DP the writers of none of the reports] thought that any rain had fallen anywhere else.

b. I gave pictures of no one to anyone. (Nishioka (2007: 71))

Nishioka (2007)は、英語の否定文は以下の(11)に示す PolP が[+NEG]を持つことにより認可され、それは否定接辞詞によるか、あるいは Pol と TP 内の否定要素との Agree の適用を通じて得られると提案している。

(11) [(CP) (C) [PolP Pol [TP T <+Tense> [VP1 not [V1' V1 <+Aux> [VP2 V2]]]]]]

本分析では、PolP への否定素性の移動を、null-Op の移動と再解釈して議論を展開する。ここで(9b)の非文法性について考察する。ここでも PDC の派生を採用し、VP 以下は(12)のように派生する。

(12) [VP [v show [pP HNP none of ~ [p' p [PP [p to [DP anyone]]]]]]]]

ここから、VP に HNP が Pair-Merge することになるが、HNP 内の[+NEG]が PolP に null-Op が移動すること考えられることができる。これにより、右方移動を適用された HNP がさらに null-Op の移動で左方移動を適用されることになるため、この移動操作に問題があると考えられる。

主要参考文献

Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.

Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Kitada, Shin-Ichi (2012) "A Theory of Linearization and its Implication for Boundedness of Movement," *English Linguistics* 29, 223-258.

Matsubara, Fuminori (2000) "p*P Phases," *Linguistic Analysis* 30, 127-161.

西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究』くろしお出版, 東京.

田中公介 (2022) 英語の前置詞残留における非対称的なペアマージ分析, *Journal of UOEH* 44 (1), 53-62.